

互補完的關係に位置づくように思われる。

また、教育指導行政と対立する管理行政とくに教員人事行政について検討することも有効であろう。人事行政との対比から教育指導行政の特質が析出できるはずである。

「教育指導行政に対する総合的評価」の前に（いやそのためにこそ）、しばらく長い回り道をしたいと考えている。

（横浜市立大学 千336 横浜市金沢区六浦二七一九一四一〇）

書評

園田英弘／濱名 篤／廣田照幸『士族の歴史社会学的研究―武士の近代―』を読んで

新谷 恭明

二〇〇年ほど前の日本教育社会学会で歴史的な素材を対象とした研究発表に出会ったことがある。当時私は初学者で議論に加われるような知見は持ち合わせていなかったが、今で言えば学校の歴史社会学のようなものを志していたので、大きな関心をもって拝聴した。質疑の中でさる著名な会員から「この研究をこの学会で発表された理由は何ですか？」という質問があった。その発表者が何と答えたのかは全く覚えていないが、その間に自分もまた答えなければならぬと私はフロアの片隅で必死で格闘していた。答は出しきれなかった。ただ、その質問者の発言の端々に「歴史研究はこの学会の守備範囲ではない」という臭いを感じたし、そう思っている会員が少なからずいたという感触とその部会の雰囲気の中で感じとったことは確かな記憶として残っている。

その後教育社会学の研究者による歴史研究の業績がさか

『日本教育史研究』第一四号目次（一九九五・八）

研究論文	戦時下教育実践の史的研究……………前田 一男 1
	―東金小学校・国民学校を事例として―
研究ノート	近世識字研究における宗人別帳の史料的可能性……………木村 政伸 43
	論評をめぐって……………藤田 昌士 7365
	第一二号抽論への藤田昌士氏の論評に就いて……………藤田 昌士 7365
	「反論」にこたえる……………吉村 敏之 76
	サマー・セミナーの報告から……………船橋 一男 89
	教育実践史研究の可能性……………船橋 一男 89
	―教師に学び、教師とかわることをめざして―
	課題と展望……………船橋 一男 89
	戦前社会教育史研究の課題と展望……………姉崎 洋一 113 101
	社会事業的社會教育史研究の課題と展望……………姉崎 洋一 113 101
書評	籠谷次郎著『近代日本における教育と国家の思想』……………佐藤 秀夫 128 124
	書評に感謝して……………籠谷 次郎 128 124
	土方苑子著『近代日本の学校と地域社会―村の子どもはどう生きたか―』を讀む……………清川 郁子 139 136 131
	清川さんの書評を讀んで……………尾崎 ムゲン 139 136 131
	昭和教育史の分析視点……………尾崎 ムゲン 139 136 131
	―久保義三『昭和教育史』（上・下）書評―
紹介	東京大学史料室……………中野 実 153
	自由往来……………渡辺 信 158
	想画教育から生活画へ……………渡辺 信 158
	―山形県長瀬小の場合―
	明治初期教科書の版木について……………千葉 昌弘 163 160
	編集部だより……………千葉 昌弘 163 160

んに発表され、『教育社会学研究 第五七集』では「教育の歴史社会学」が特集されるなど、この領域は教育社会学研究の重要な一領域を担うようになったと言えるし、二〇年前の学会の空気を思えば隔世の感がある。

さて、本書は「大学院では教育社会学を専攻していた」（あとがき）という共通点で結ばれた三名の著者による士族研究の蓄積をまとめたものである。三氏は早くから教育社会学者として歴史研究に関心を寄せていた天野郁夫氏を中心とした「丹波篠山をフィールドとした歴史研究のプロジェクト」（あとがき）にかかわったところから本書の構想は始まっていたということでもあるから、本書は教育社会学における歴史研究のひとつの水準を示すものとして世に問われた著作であると理解したい。

本書の構成は左の通りである。（ ）内は執筆者。

序章	武士の近代——歴史社会学の視点から——	(園田)
第I部	経済と社会	
第一章	社会学における「士族」	(濱名)
第二章	武士から士族へ——社会層としての変化	(濱名)
第三章	士族層の分解——岐阜県の事例	(濱名)
第II部	家族	
第四章	武士の通婚、士族の通婚	(廣田)
第五章	養子・相続・隠居——幕末と明治	(濱名)
第III部	教育	
第六章	士族と平民の学校教育機会	(濱名)
第七章	士族層内部の学校教育機会の分化	(廣田)
第八章	城下町における小学校就学	(濱名/廣田)
第九章	明治初期初等教育就学と教員への道	(濱名)
終章	明治維新、身分秩序と社会変動	(廣田)
あとがき		(廣田)

「序章」は園田英弘氏が書き下ろしで執筆しているが、後は濱名篤氏と廣田照幸氏のこの約十年間の論稿(終章のみ書き下ろし)をまとめたものとなっている。序章と終章を除けば「第I部 経済と社会」「第II部 家族」「第III部 教育」の三部編成になっている。

序章は幕末から明治初期にかけての武士身分の解体過程

史分析ではなく、歴史研究の中の社会学的なものというべきものである(二九頁)という姿勢で書かれたというのであるから、その利益は歴史学の側に大きいのではないだろうか。その意味で「こうした方法的立場は、歴史家による歴史学に対する一つの挑戦である」という挑発的な言辞も好意的に受けとめたいと思う。社会学と歴史学の縄張り争いという意味での「挑戦」ではなく社会学研究がその枠組みから抜け出せなかった部分と、歴史学研究が陥っていた限界をつないで補完し、よりダイナミックな歴史像を描き出す試みであるというふうには理解したい。但し、この点に関して不満がないわけではないが、それは後述することにする。

第I部は士族の社会・経済状況をその生計状況、生活様式、特権剥奪の問題、職業生活等の諸相から分析し(第二章)、さらに明治一六〇七年の岐阜県の事例を素材に士族層の分解過程を分析している(第三章)。ここでは「輩出率」という尺度を使用することによりこれまで士族の優位性が低下していったとするイメージに対してむしろ優位性は高まったのだという結論を導き出し、明治という時代が士族優位の社会であったことを実証していて興味深かった。輩出率は本書の中ではその後も重要な尺度として使われているが、その使用を提唱している第一章は「士族とは何か」

を「武職への回帰」「武士の単身化」「機能主義的武士観」「職をめぐっての武士の再編成」「四民平等の成立」といった問題提起をしつつ説明している。そして本書の問題の所在を「身分」と「階級」を鍵概念として「士族の没落と上昇転化」「喪失感とそれへの対処」「職業の問題」などに本書の問題意識を設定している。非常に刺激的な文章ではあるがそのほとんどが園田氏がすでに自著『西洋化の構造』(一九九三年 思文閣出版)の「II 西洋化の深層」の「第二章 郡県の武士——武士身分解体に関する一考察——」で論じている内容の焼き直しであることが気にかかった。そうした部分を序章としていることは本書が園田氏の『西洋化の構造』のサブディレクトリという位置づけだということだろうか。

ところで本書は「方法的にいえば、歴史社会学の実証分析としての一つの試み」(三七頁)としてつくられたという。しかし、著者はそこで一般的な「歴史社会学とは何か」などという議論はしない。そうではなくて「社会学の理論や概念を用いて歴史を分析することによって、どのような可能性が開示できるのかを示すこと」(三八頁)がより重要なのだと主張する。歴史研究に新しい視角を与えるものであるならばそれは歴史学にとっても社会学にとっても有益であるにちがいない。実際本書は「社会学の中の歴

という定義づけも含めて序章と同様に全体の概念規定をしている章となっている。その意味では序章とまとめて一つの章に納めた方がよかつたのではないか。もちろんこの第一章が初出の段階で第二章の部分とセットで書かれた論文であろうから無理な注文かもしれないが、敢えて園田、濱名両氏の総論的な論稿を合わせて(できれば廣田氏も加えて)共同研究らしい序章をまとめていただきたいと願うのは第三者の勝手なないものねだりであることは承知している。御容赦願いたい。

第II部は「家族」と題しているが、婚姻と相続の問題が中心である。通婚については上・中士層と卒との間ではもとより異なった婚姻ネットワークが成立していたこと、そのネットワークが廃藩後の社会変動の中で変化し始めることなどがデータに基づいて立証されている。婚姻という最も生活の根元的な部分で身分による棲み分けがなされていたことを数字的に示されたのは非常に説得的であった。また、第五章の相続については養子による相続が多いことがやはり数字で示されるが、それが「廃藩以前との比較が十分にはできなかった」(二〇七頁)のは確かに残念ではあった。しかし、「家継承のメカニズムには少からぬ連続性があったようである」(二〇九頁)ことが推定される数字は示されたと思う。ただ第五章については延々と先行研究の

成果に基づく家継承制度の説明が続き(「課題」を含めて一八頁)、実際のデータ分析が二二頁にとどまったことが多少説得の迫力を減少させているように思える。

第三部の「教育」についての検証は本書のもっともメインとなるべき部分であろう。士族の学校教育機会について学校利用層の分析という観点からアプローチし、士族が当初は高い割合で学校教育を利用しながらも平民層によりその優位性が漸減するといった「常識化」されたイメージを「輩出率」の観点をいれることにより否定することに成功した。第六章では千葉中学校について、第七章では篠山鳳鳴義塾について分析がなされ、第八章・第九章では岩村藩の小学校を素材に検討がなされている。それらの成果については高く評価したいが、気になる点をいくつか指摘させていただきたい。

まず、先行研究の問題である。第六章では士族イメージの「常識化」を促した教育社会学及びエリート研究の批判を行っているが、天野郁夫氏の一九八三年の著作を除けば後は一九六〇年代から七〇年代の研究である。天野氏が本書の執筆者と深い関係にあることを考慮して除外すれば、残りの批判の対象はおおむね二〇年前の教育社会学研究になる。ということは一九八〇年代、九〇年代には士族について言及された研究やエリート研究は全くなかったという

のだろうか。「常識化」された士族イメージを鵜呑みにした研究もなかったのだろうか。そうした研究すらないのであるならばそのイメージとはどこに存在しているのか、などという愚問も出てきてしまいそうだ。六〇年代から七〇年代につくられたイメージが九〇年代になってなお「常識化」している事実を示して初めてこのイメージの打破が意味を持つのではないだろうか。

同様のことは第七章についても言える。ここでも再び旧来の士族イメージについて同様の整理がなされ、そこで例えば中等教育と士族の関係を検討した研究として菊池城司氏の一九六七年の論文が代表的なものとして紹介されているが、菊池氏の研究は先駆的な研究に位置づけられるものであって、その先駆性において評価されるべきものであると私は思う。またパッシンやドーアの近代化論的な教育史研究が引き合いに出される。果たしてパッシンやドーアが示した近代化の枠組みは教育史研究において現在でも有効な議論であるということなのだろうか。まして東西の緊張関係が崩壊した九〇年代において近代化論が存在意義を持つとは思えないのだが。

序章で書かれているように本書の「こうした方法論的立場は、歴史家による歴史学に対する一つの挑戦である」という。先に私は「挑戦」という言葉を相互補完しうる可能

性に置き換えて理解したいと書いたが、文字通り「挑戦」であっても「相互補完」であっても八〇年代から九〇年代の教育史研究の批判や検討がなされていないのは残念である。相手がいなければ「挑戦」にはならないのだから。少なくともそうした作業を通じて現在の教育史研究や教育社会学研究の中での本書の存在理由を示して欲しかった。そのことによって本書の価値はより高いものになるであろうと思う。なぜならば本書の分析によって導き出されたデータはこれまでの教育史研究で予見された事柄を裏づけるに充分な説得力を持つものであるからである。

(名古屋大学出版会、一九九五年二月、三五三頁、

五六六五円)

(九州大学 〒811-34 福岡県宗像市城西ヶ丘四一三三―五)

著者から書評者へ

書評を読んで

広田 照 幸

この書評とリブライの欄は、入会以来毎号楽しみに拝読

させていただけってきた。ところがいざ自分が書いた本が書評に取りあげられてみると、限られた枚数でリブライすることの難しさを味わうはめになった。とりあえず、本書を取りあげて下さった編集部と、書評をして下さった評者へと感謝の意を表しておきたい。

書評の前半、序論と第一部・第二部についての評者の指摘はほぼその通りである。執筆分担の関係で序論と第一章とは別々のものになったのだが、構成上からいえば、一緒にした方がよかったかもしれない。また、第五章が先行研究の検討にやや深入りしすぎてしまっているという点も、確かにそういうきらいがないではない。

また、実証研究への出発点として示した序論の分析枠組において、園田の原著『西洋化の構造』の一つの章と論点が重複している部分があるのも事実である。評者の「サブダイレクトリ」という語は気になるが、本書の実証研究は園田の「郡県の武士」論に触発されて展開していったもので、読者の理解を助けるためにも、論点が重複した部分をあえて繰り返さざるをえなかったためである。それゆえ、園田の原著を既に読まれた方には、確かにこの部分はものたらなさを感じられるかもしれない。

さて、少し詳しく論じてみたいのは、第三部への論評以降で述べられている、次の二点についてである。一つは、

先行研究への言及の問題である。評者は特に第六章・第七章を指して、教育史の先行研究への言及が不備、または不備（近代化論について）であるといわれている。また、八〇年代・九〇年代の研究を「先行研究」として取り上げていないではないかと批判されている。もう一つの点は、それと関連して、「本書の分析によって導き出されたデータはこれまでの教育史研究で予見された事柄を裏づけ」たものだと、本書の評価を下されている点についてである。

前者の点については、確かに、評者ご自身による一連のご労作をはじめ、明治前期の中等教育機関の設立・維持と士族との関わりに言及した、教育史の研究はないわけではない。しかし、第一に、士族に論及した研究のすべてが「先行研究」だとは、われわれは考えていない。われわれが焦点を当てたのは、士族の社会移動という、きわめて限局された側面だからである。しかも、第六章は、士族と平民との機会構造の時系列的変容が、第七章は、士族内部（「身分内序列」各層の間）の機会構造の格差が、具体的な分析課題であった。それゆえ、われわれが「先行研究」として扱ったのは、それら限定した課題に直接関わるもののみであった。

このように「先行研究」を個別の具体的な課題に応じた限定的な範囲で整理していったために、本書はもともと一般見方は「先行研究」に値しない、無視すべき見解だということであろうか。

さて、もう一つの論点——「本書の分析によって導き出されたデータはこれまでの教育史研究で予見された事柄を裏づけ」たものだという評者の評価についてである。

第一に、「予見」していたといわれるのであれば、誰が、いつ、どこで予見したのか、また、本書の多岐にわたる論点の中のどの部分を「予見」していたのかを示していたきたかった。管見の限りでは、第三部の中心的な第六章・第七章の知見を「予見」したものは見あたらなかった。教育史家の方々のご研究は、しばしば史料の引用や個別具体的な事件の再構成そのものの中に埋め込んだ形で新たな知見を提示されている。しかも、評者は、どこで誰が何を「予見」していたのかをはっきりとは示されていない。それゆえ、今回、一通り調べ直してみたものの、「予見」されていたことをまだ確認できていない。落としたコンタクトレンズを数の中で探すような作業である。

第二に、「予見」した研究が仮にすでにあったとしよう。しかし、「予見」と「実証」は別物である。予見はいくらでも可能な選択肢があり、対立・矛盾する予見が併存し続けることは可能であるが、実証は、いずれはどこかへ収斂していくはずのものである。

的な「教育史研究や教育社会学の中での本書の存在理由」（評者）のレベルの議論はしていない。しかし、本書の成果がどういう研究上の位置づけになるのかは、むしろ読者の判断の方に委ねるべき課題であると思われる。実際、教育社会学の中での本書の位置に関しては、『教育社会学研究』第五七集の中のいくつかの論稿がそれについて触れている。

第二に、評者は、八〇年代・九〇年代の研究を「先行研究」として取り上げていないではないかと批判されている。しかし、第六・七章が最初に活字になったのは、それぞれ一九八四、八七年である。八〇年代半ばにわれわれがまがりなりにも「実証」した命題を、われわれの既発表論文への言及もなしに、しかもまさか九〇年代になって「予見」（評者）をしているような研究があるとするならば、それを「先行研究」として位置づけよというのは、少し理不尽な要求ではあるまいか。

ついでに言えば、教育社会学の領域で、八〇年代半ば以降、明治中期までの士族をまともにとりあげたのは、本書でも引用した、天野郁夫の近著（『学歴の社会史』一九九二年）以外には見あたらない。なお、東西の緊張関係の終焉で九〇年代には近代化論が存在意義を失ったという評者の議論は、私には理解不能である。ドーアやパッシンらの

もし、教育史プロパパーの方法論で「予見」しただけでなく、たとして、もしわれわれの研究で採用した方法・視点が「実証」に成功しているとするならば、それは、歴史研究の新たな可能性を含んでいるはずである（社会学と歴史学双方にとって）。園田が序章で述べた〈挑戦〉とは、歴史家（教育史家）への挑戦ではなく、歴史家（教育史家）の方法論への〈挑戦〉なのである。

評者は、本書のデータはすでにこれまでの研究から「予見できていた」といわれる。しかしながら、既存の方法では「予見」や推測しかできないものが、実証レベルで分析できるとするならば、その方法やその方法による成果の妥当性こそを、教育史家の立場から論評していただきたい気がする。

教育史家の方の目から見て、本書がどう位置づけられるのか、また本書で展開した方法はどうか評価されるのか、そうした点をうかがいたかったのに、そこに踏み込んだ対話にはならなかった。そのことが、いささか残念である。安易な融合はありえないし望ましいとも思わないが、歴史学と社会学とが、そして教育史学と教育社会学とが、対話と交流を進めていくことは、大事なことだと思う。こういう機会を与えて下さった皆様にあらためて感謝したい。